

ライヒェナウ島写真紀行

中 島 和 男

1. ライヒェナウ島を訪問する

ドイツ最南端に位置し、スイス、オーストリアとの国境でもあるボーデン湖（*der Bodensee*、コンスタンツ湖とも呼ばれている）とその周辺地域は豊穡な大地、豊かな水とアルプスを望む風光明媚な保養地として知られている。この湖の西側に起伏のない平坦な島が浮かぶ。この島はライヒェナウ島（*Insel Reichenau*）と呼ばれている。ここでは、以下に述べるように、その温暖な気候の恩恵を受け豊かな湖とともに開墾時以来肥沃な土地ゆえに農耕が盛んになっていった。この恵まれた自然環境によりこの地に根を下ろすこととなった最初期の教会、修道院はその敷地内にも菜園を設け、これが修道士たちの勤労の基盤ともなった。この自然環境こそ後にこの地に開花するに至った修道院（文化）をより活性化させる原動力でもあった。今日においてもその史跡としての関心だけにとどまらずその風光明媚な自然ゆえに季節を問わず多くの旅行者が島を訪ねている。また、湖畔南側にはこの地域最大の都市のコンスタンツ（*Konstanz*）が位置している。この町は歴史上、ボヘミアのヤン・フスが異端尋問で火あぶりの刑に処された都市としても名高い。さらに湖東南部スイス側にはこのライヒェナウ島の文化を継承し、さらに修道院文化の一大拠点として開花するに至ったザンクト・ガレン（*St. Gallen*）が位置している。

スイス・アルプス山中に二つの源流を持つライン川、この川はザンクト・ガレンの東側からいったんこのボーデン湖に流れ込む。そしてその西端から再び流れとなってバーゼルに至るまでは西へと向かう。ライン川は欧州屈指の大河とは言え、この辺りまでは川はまだあまりその様相を呈していない。このライン川上流流域を上部ライン地方（*der Oberrhein*）と呼ぶ。

このボーデン湖の西端は湖に突き出た半島の関係上やや複雑な地形を有しており、

以下に記すライヒェナウ島 (Insel Reichenau) は、この湖の西端、ウンター湖 (der Untersee) と呼ばれる北側の半島に接しているおおよそ東西5キロ、幅1.5キロ、総面積4.3平方キロにわたる起伏のないボーデン湖最大の島である。気候温暖な保養地として知られるこのライヒェナウ島は起源を辿ると中世初期の724年、ベネディクト派の修道院が建てられて以来、信仰の島として名高い。文字どおりここはドイツキリスト教の源流の地でもあった。

信仰の島と言えはたしかにだれもが納得するだろうが、しかしなぜライヒェナウを取り上げるのか。欧州をキリスト教文化圏と呼ぶならば、別にほかの場所でも地域でもよいだろうに。キリスト教がアルプスを越えた北の地域に入ってきたころ、特にカロリング朝の時代ではその王国内には約800余りの修道院があったと言われている。その中でしかし王国直属のそれはとりわけ重要で、その直轄となる拠点では文筆活動が行われており、その数は約80と伝えられている。ライヒェナウはその中の一つであったのである。ちょうど欧州と言われる概念がようやく成立するかに見えた時代、ライヒェナウの諸教会では活発な活動が繰り広げられていた。その一つが以下にも触れる壁画である。それがライヒェナウ独自の作者の手によるものなのか、それとも渡り画家と呼んだらよいのか、宮廷の吟遊詩人のごとくに各地を転々としてフレスコ画を制作していった者たちの手によるのか、は一概には定めがたいが、とにかくライヒェナウ島にはその頂点ともいえる壁画群が残されこの一大拠点となっていることだけは確かである。

この島を訪れるにはコンスタンツあるいはラドルフツェル (Radolfzell) から渡船によるか、あるいは鉄道利用の選択肢がある。後者の場合、ドイツ側からならばラインの流れに沿ってバーゼル・バーデッシャー駅 (Basel Bad. Bhf., 間違えやすいが、ドイツ側から見てバーゼル本駅 [Basel SBB] の一つ手前) からコンスタンツ方面に向かう DB (Deutsche Bahn)、ドイツ鉄道のローカル線が通じている。

この島内の教会として聖マリア・マルコ聖堂 (724年ごろ) と聖ゲオルク教会 (9世紀末)、聖ペーター・パウロ教会 (799年) の存在を挙げなければならない。2000年にユネスコの世界遺産に登録されたライヒェナウ島 (Insel Reichenau) への下車駅となるライヒェナウ駅 (Bhf. Reichenau) はこの路線の中の無人駅である。とは言え駅から島へはほぼ1時間に1本のバスが通じているので不便は少ない。この駅から島へは、両側にポプラが茂る直線の道路が伸びている。これは1838年に築かれた堤防で、

この道路が島内の東西に延びる幹線のひとつであるピルミン通り (Pirmin Strasse) である。

ピルミンとはしかしあまり耳慣れない名称ではないか。この名前が幹線通りにつけられているのはこの人物の名称こそ島の文化的起源を示す所以である。ピルミン (Pirminius) に関する詳細は分かっていない。彼はアイルランド出身の巡回宣教師であったようだ。生まれは670年ごろ、没したのは753年11月3日 (ホルンバッハ修道院にて) であった。島の修道院の起源についての詳細は明らかになっていない。ただ、僧ピルミンが約40人の信徒らとともに聖母マリアと聖ペトロを讃えるべくベネディクト修道院を建立した、と伝えられている。ピルミンがこの島を去って行ったのが727年、その後彼は他の地域にも修道院を建設して行くのである。ライヒェナウ島に上陸したこの聖ピルミンに関して以下のような伝説が伝えられている。

「全能の主の使徒ピルミウスが島に足を踏み入れば、ありとあらゆる身の毛もよだつ蟻(ぜん)虫類が向かい側から水辺を求めて這いまわる有様、水面には浮かぶようにとぐろを巻く気味悪い蛇、こんな生き物人の為にならぬとばかりに雑草ともども打ち砕くこと三日三晩、助っ人もありで、やっとのこと耕作可能な地面と相成る。三日三晩地ならしの後、やっとのことで平地としそこに神の館を建立するに至ったのである。」(Leben und Taten des Bischofs Pirmin, 2005 Heidelberg より)

ライヒェナウ島は東側からオーバーツェル (Oberzell)、ミッテルツェル (Mittelzell)、ニーダーツェル (Niederzell) の三地区に分かたれている。この島の歴史は先に述べた三つの教会および修道院の建設とともに始まる。ピルミン通りが島へ渡り切るとそこはオーバーツェル地区で間もなく右側に見えるのが聖ゲオルク教会 (St. Georg) である。



図 1

(ライヒェナウ島全体図, Insel Reichenau im Bodensee, Erlebnisführer 2019 より)

2. 聖ゲオルク教会 (St. Georg)

島の三つの教会の中ではいちばん最後に完成した（身廊、側廊ともに9世紀末から10世紀ごろ）。規模は最も小さいが、また後世に改築を経てはいるもののドイツ国内でバシリカ様式を今日に伝える教会の一つである。

この教会の起源について正確なことはわからない。しかし、言い伝えによるとその直接の動機を付与したのはハトウ3世（Hatto III.）であった。当時マインツの大司教（891-913）であると同時に帝国の名誉司教という最重要ポストの座を占めていたハトウはケルンテンの王アルヌルフ（Arnulf）のローマ訪問に随行した際、教皇よりあるものの寄贈を受けた。それはこの教会の名の起源である聖ゲオルクの聖遺物、すなわち、同名の聖者の遺骨がこの地にもたらされたとされる。このことが教会建立の直接の動機となったのであろうと伝えられている。聖遺物信仰とは聖遺物に触れるとご利益があるとされるいわば伝承であり、当時広く流布していた。



写真1



写真2 東側正面

西側に位置する入口部のアプシス、半円形部は925年から945年ごろの建立時の姿を残している（写真3）。東側の十字交差部はほぼ正方形でバシリカ様式の三廊式である。また、建物内身廊地下にはこの教会名の由来となっている既述の聖遺物が収められている。

会堂内に目を移そう。西側入口上部アプシス、半円形部にはキリストの最後の審判が描かれている。ただしこれは後世に描かれたもので（1708/09年）ある。より古い画像として玄関を背にして壁面両側にそれぞれ4枚ずつのフレスコ画が並ぶ。これらは10世紀末ごろに描かれたと考えられている。キリストの秘跡についての一連のストーリーを形成しており、順を追うと北側手前から祭壇へ向かい、さらに南側壁面を玄関へとの流れとなっている。まず入口手前から順を追って示す（写真5）。

これは「レギオンの名を持つ悪霊が豚の中に送られる。そして豚は湖になだれ込み溺れ死んだ」（マルコ第5章1から19節に該当）、と肉眼では確認されにくい、以下それぞれの画像の下部にラテン語による“Tituli”，表題が記される。2枚目は「（イエスにより）水腫が癒された病人が重荷から解放される」の記述のルカ第14章1から11節までを示す（写真6）。



写真3



写真4



写真5



写真6

写真7はイエスが嵐を鎮めるシーンである（マタイ8章23から27節）。

写真8はタイトル文字が一部消失している。ヨハネ9章1から38節まで、イエスは生まれつきの盲人を癒し、地面に唾しそれで土をこねてその人の目に塗る場面を示す。

次に南壁面祭壇側から記す。損傷が進行しラテン語表題も大部分失われている最も祭壇寄りにはマタイ8章1から13節のライ病を癒す場面である（写真9）。



写真7



写真8



写真9



写真10

南壁祭壇側より二番目ははやもめの子どもを生き返らせるルカ第7章11から16節の箇所に相当する（写真10）。



写真11

写真11は指導者の娘とイエスの服に触れる女のマタイ9章18から26節の場面を示す。祭壇南側いちばん入り口寄りの場面はやや長い場面を示している。ラザロの死からイエスの復活までを語る（写真12）。

北側壁祭壇のわきに当時の世相の一端を示すような図が描かれている。写真13の左下の位置である（写真14）。四方を悪魔が担っているのは羊皮紙ではなく、牛の皮とされる。ここに記される文字は以下のように読める。これは中世後期または近世初期のドイツ語（初期新高ドイツ語）の書記法を示し、14世紀ごろに描かれたと判断できる。

Ich wil hie schribvn
 von diesen tvmben wibvn
 was hie wirt plapla gvsprochn
 vppigs in der wochvn
 was wirt allvs wol gvdaht
 so es wirt für den richtvr braht



写真12



写真13 (入口から正面を見る)



写真14 (拡大図)

訳)

ここに記そうおろかな女、
来る日も来る日もおしゃべりばかり、
最後の審判下るとき、
それをばいかに思うぞや。

これらの壁画の多くはアルプス北部地域で紀元1000年ころの最も原型に近い姿を伝えている。とは言え多くの教会建築、聖画と同様に最初期の姿のままで今日に至ったのでないことは自明である。これらのフレスコ画もその後歴史の流れの中で様々な変化にさらされざるを得なくなった。まず14世紀に最初の教会の改築が行われた。ラテン語でレクトーリウムと呼ばれる内陣格子（聖職者の内陣と信徒席の間に設置される隔壁）が増設された。その後1620年ごろまでにこれらの壁画の多くは上書きされてしまった。さらに18世紀に入るとほぼ白塗りで埋め尽くされたほどに至る。最初の復元作業に取り掛かったのは19世紀も後半以降であった。この修復作業の過程において歴史の流れの中経たさまざまな改変は同時に尊重され、1988から90年に行われた最後の修復作業を経て現在の姿に至る。

聖ゲオルク教会は保存のため常時開放は行わない。特別行事を除く毎日12時半と16時からのガイドによる会堂案内時のみ見学可能である（所要約1時間，2019年8月現在）。

3. 聖マリア・マルコ聖堂

島の中ほどミッテルツェル地区にある島最大の教会である聖マリア・マルコ聖堂へは聖ゲオルク教会前のピルミン通りを直進すればよい。一方，路線バス利用の場合はバスはいったん南岸へと迂回し，西端のニーダーツェル地区を經由してからミッテルツェルに至る。東側からピルミン通りが終わり，アプト・ベルノ通り（Abt Berno Strasse）と名を変えるミッテルツェル中心から右方向，墓地北側ブルク通り（Burg Strasse）に沿って修道院が立つ。島の三つの教会の中で敷地，規模ともに最大である。

この聖マリア・マルコ聖堂はベネディクト派修道院を前身とする。この地に最初の修道院が置かれたのは724年ごろであった。現在に残る姿のうち，尖塔は11世紀半ばごろの遺構を残し，東側側廊は8世紀初頭，身廊は12世紀ごろとされる。最初期はこの修道院の構造はほぼ正方形であったようである。9世紀になるとこの正方形の位置



写真15 東側

の北側にはバシリカ様式を基本とする教会堂が増築された。僧ハイト（Bischof Heito）の在職中（806から823年ごろ）修道院に隣接して新たに教会堂が置かれるようになる。これをマルコ教会と呼ぶに至り、これが今日の構造の基本となった。その間火災にも見舞われ写真15, 16, 17はほぼ正方形であった最初期以来の修道院中庭からの画像である。

正方形回廊の形をとる修道院の北側に尖塔を持つ教会堂が立つ。そして東端の祭壇部は後期ゴシック式である（写真19, 20）。

次に教会堂について記す。今日に至るまで数度の火災に見舞われたことから再建、改築を経てきた。現在の姿は後期ゴシック様式の流れを組む。

写真22は西側祭壇である。1470年ごろのゴシック様式とされる。

会堂には一連の物語を形成するようなフレスコ画はなく、一部のみ残されている。ただし損傷が激しいものも含まれる（写真23）。

今回の訪問では時期が合わず接することはできなかったが、ライヒェナウ島最大の行事として“*Heilig-Blut-Fest*”（聖血祭）が聖霊降臨際の一週間後に行われる。この祭礼の起源はゴルゴダの丘の聖なる血を受けた聖遺物の一つとされる大司教の十字架



写真16 同南側



写真17 教会堂身廊南壁面



写真18 会堂北側境内より西側を望む



写真19 東端祭壇部



写真20 尖塔, 西側入口



写真21 礼拝堂内部



写真22



写真23

が紀元925年に修道院が寄贈を受けたことによる、と伝えられる。

ライヒェナウ島最大規模のこの修道院は図書室を併設するに至る。図書室なしの修道院は考えられなかった。僧ヴァルド（Abt Waldo, 714年ごろ-814/5年）はこの修道院付設学校と図書室の創設者として名をとどめている。10世紀になるとこの修道院は文献に関して、また写本挿画制作の拠点として最大規模を擁するまでに至った。当時のドイツ語圏、大まかにカロリング朝の勢力範囲内において、最初期はラテン語により記された写本が後に時代を重ねるにつれ漸次ドイツ語表記に代わり、修道院はドイツ語文化圏の学問所として整備されるに至った。ここライヒェナウを起点としてスイス側のザンクト・ガレン（St. Gallen）、バイエルン地方ではフライジング（Freising）、レーゲンスブルク（Regensburg）、エーバースベルク（Ebersberg）、グラーフティング（Grafing）、中部ドイツのフルダ（Fulda）、ヴュルツブルク（Würzburg）などが後のドイツ語の基礎を形成する執筆活動の中心的起草地となった。ライヒェナウ関連の写本類はバイエルン国立図書館をはじめトリアー、バンベルクなど国内外の国立図書館で保存されている。

4. 聖ペーター・パウロ教会

この教会へは島内路線バスで終着 Mittelzell-Museum の一つ手前 Camping/Genslehorn バス停下車、ポプラ並木のニーダーツェル通り (Niederzeller Strasse) (写真24) を西北に向かって歩くと菜園畑の中に建つ会堂が見えてくる。これが聖ペーター・パウロ教会である。

このニーダーツェルに置かれた聖ペーター・パウロ教会 (写真25) はヴェローナのエギーノ (Egino von Verona, 730ごろ-802) により建立された。アレマン地方ではヴェローナから派遣された僧によるカロリング朝時代最初の拠点となった。エギーノはもともとは地元、アレマン地方の出身と言われており、いわば里帰りした形となったのであった。ここニーダーツェルで亡くなるまで最後の三年間を過ごし、この教会に埋葬された。僧侶として彼はことのほか書物にエネルギーを注ぎ、そのための学校



写真24

をも整備し数多くの写本の作成に力を注いだ。エギーノ写本（Egino Codex）と呼ばれる装飾を施した一連の写本はカロリング朝下においても名高い。

まず外観であるが、写真25は Niedrzeller Strasse から見た、畑に囲まれた遠景である。写真26は教会入り口、正面は西側即ち画像左であり、二本の尖塔は東側の祭壇側である。白壁の手前の建物は現在博物館となっている（写真26）。

創建以来中断を含めて改築を重ねてきた会堂を外観を見る限りでは取り上げてきた三つの教会の中で最も地味に思える。聖ゲオルク教会のようにロマネスク様式を濃厚に残していると一目でわかるわけでもなく、また聖マリア・マルコ修道院の大きさも見られない。

会堂内部に至っても天蓋部はバロック様式であり、やはり後世の改築がより目立つ。しかしながら壁面の一部にフレスコ画を残し（写真27, 28, 29）、記述の三教会とともにライヒェナウ島において既に最初期九世紀ごろには壁画はその盛期を迎えていた。



写真25



写真26



写真27



写真28



写真29

5. ザンクト・ガレンとライヒェナウ

以上ライヒェナウ島の教会群について現地訪問報告を試みた。歴史的にも美術史、建築史的にも初期キリスト教の痕跡を今日にまで伝えるこれらの三教会並びに修道院の最盛期は八世紀にはじまりおおよそ12世紀までであった。これ以降、720年に創建されたザンクト・ガレン修道院の存在がより大きくクローズアップされるようになっていった。この意味においても、ライヒェナウの教会はこのザンクト・ガレン修道院との関係抜きに語ることはできないのである。ライヒェナウもザンクト・ガレンともにベネディクト派であり、両者の間には文献のみならず、相互の人的交流も活発であり、両地域の修道僧はあたかも兄弟に等しい密な関係を結んでいた。事実、僧ヴァールド (Abt Waldo 786-812) とヴェルド (Abt Weldo 784-812) の両相の間で兄弟としての契約が結ばれていた。また、Gebetsverbrüderung、これは祈祷兄弟、共同体とでもいうのであろうか、このような関係が中世期の修道院間で数多く締結されていた。この関係は祈祷やミサによる交流といった日々の交流にとどまらず死後の関係にまで及んでいたのであった。これは当時の名簿“*liber vitae*” (兄弟同盟祈祷書) に3万を超える名簿のリストがあることから確認できる。かかる密な関係をライヒェナウの教会はザンクト・ガレンとの間に有していたのであった。

さらに、現在ザンクト・ガレン修道院図書室に保存展示されている「修道院設計図」(図2) がこれを裏付けている。これは交流が密であったライヒェナウで作成されたと言われている。

6. まとめに代えて

ライヒェナウ島訪問はコンスタンツからならば日帰りでも十分に可能である。島内の交通も路線バスが各地区を結んでおり、車利用でない旅行者でも大きな不便はない。しかしながらそれぞれの教会は各地区に分散しており、これら三教会を中心として島内のそれぞれの地区に博物館が開設されており島の由来をはじめ各教会修道院に関して詳細な展示がなされている。したがってこれらの教会群の一つひとつをその歴史を含めて丹念に見学しつつ、ボーデン湖周辺的环境までを理解するには最低でも数日間の滞在は欠かせないであろう。掲載した画像からもわかるとおり、それぞれの教会は

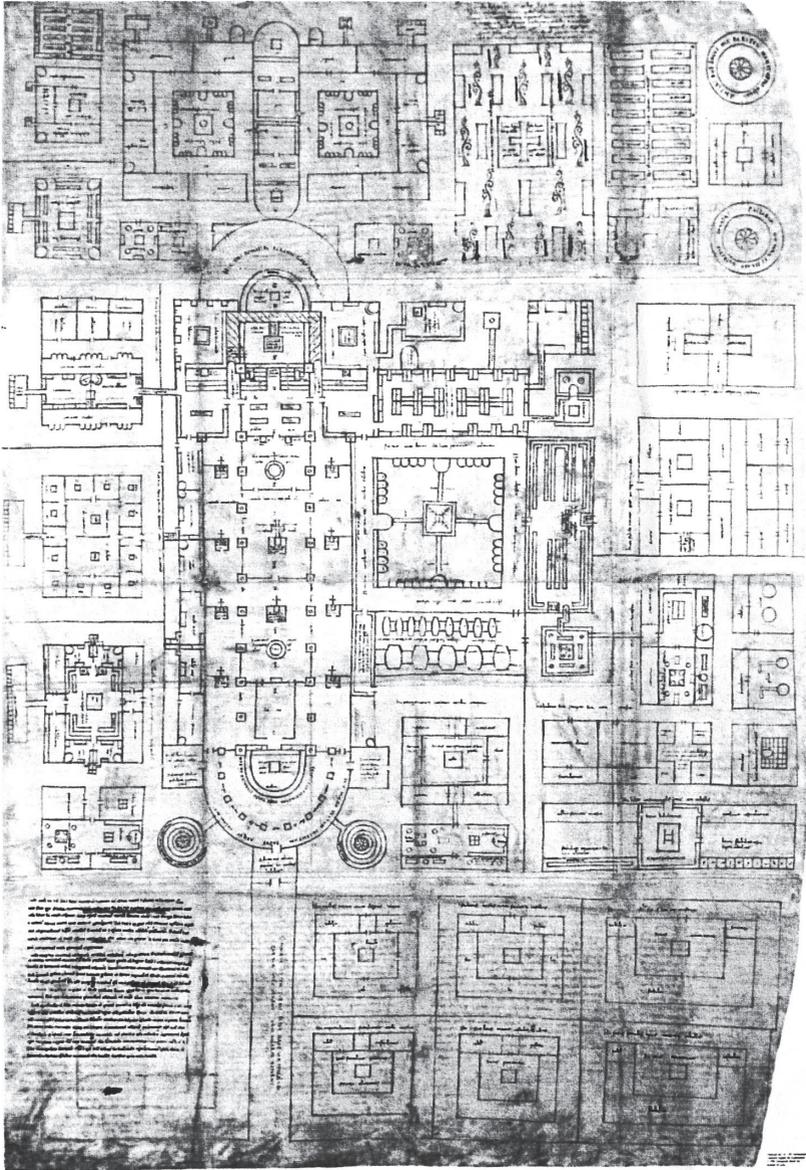


図2



写真30 ザンクトガレン修道院尖塔部



写真31 同，北側より望む



写真32 会堂内部

周囲に豊かな田畑と湖に囲まれている。

自然環境に恵まれていたことは確かではあるけれど、これが修道院生活と密接なかわりを持ってきたことも理解したい。田畑は教会・修道院の敷地内にも及んでおり、修道士たちに重要な労働を与えていたのであった。豊かな農作物は今日ではもちろん訪問者を喜ばせる重要資源ではあるけれど、単なる観光資源ではなかったのである。起伏もない島内で幹線道路のピルミン通りは直線区間が長く、また交通量はかなり多いように見受けた。車はかなりのスピードを出しているので道路の横断には細心の注意が必要である。

最後に、教会堂内フレスコ画像の写真については、文化財保護の立場から撮影時にも補助光使用が不可能であった。不鮮明であることをお詫びしたい。



写真33 聖ゲオルク教会裏手の湖畔



写真34 聖ペーター・パウロ教会北側も直ちに湖畔に面している